

記録＝記憶化される炭鉱

NHKアーカイブス学術利用トライアル研究から

甲南女子大学 木村至聖
shisei2@gmail.com
@SAmC研究会 (2013.7.13)

自己紹介

- 木村至聖 (きむらしせい)
- 甲南女子大学人間科学部講師
- 文化社会学(文化遺産の社会学・記憶の社会学)、地域社会学(旧産炭地域)
- 過去の記憶や記録、遺物の意味づけをめぐるポリティクス、可能性の研究

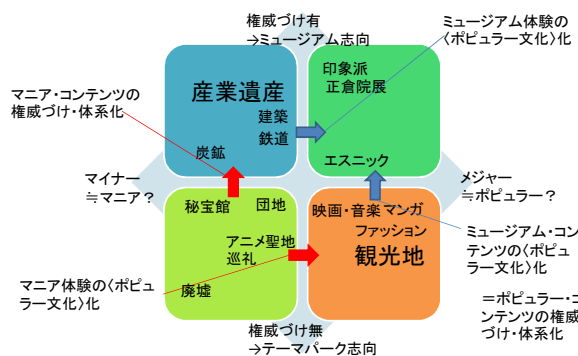
『ポピュラー文化ミュージアム』の感想

- 「ポピュラー文化」がテーマではあるが、ハコモノ以外、ミュージアム「的」なものも含めており、総括的なミュージアム論になっている
- 「文化の収集・共有・消費をめぐる〈闘争の現場〉」(vii)としてミュージアムを位置づけ、多彩なケーススタディを提示

ただし気になる点1)2)

- 1)ミュージアムの置かれた(地域的、歴史的)文脈への言及が不十分
- →ミュージアムの今後(持続可能性など)を考える上でも不可欠な要素であるはず
- 2)ジャンル分けの粗さ...とくに「マニア文化関連」
- →「ポピュラー」概念の政治学を視野に入れ、文化の序列化やカテゴリー化の力学のなかで配置し再配置される〈闘争の現場〉として「ポピュラー文化」を考えていく(vi)ためには、マニア文化の位置づけをもう少し丁寧にする必要があるのでは？

2)「ポピュラー文化」考察のための2軸



私のこれまでの研究テーマ

- 『ポピュラー文化ミュージアム』では、コラム6「軍艦島——廃墟or産業遺産?」を担当
- 主な研究業績
- 2011, 「文化遺産と記憶の社会学——旧産炭地域における産業遺産の保存と活用をめぐる」(博士論文).
- 2009, 「産業遺産の表象と地域社会の変容」『社会学評論』60(3): 415-32.
- 2007, 「文化遺産イデオロギーの批判的検討——近代西欧の廃墟へのまなざしを手がかりに」『ソシオロジ』51(3): 3-19.

なぜ炭鉱なのか？

- もともと「軍艦島」にも「炭鉱」にも縁もゆかりもなく、「マニア」であったつもりもない
- 当初の研究関心:なぜ「軍艦島を世界遺産に」などという大胆な発想が生まれ、それが誰に支持され、今日のように現実化してきたのか？
- 軍艦島(or炭鉱)はまさに、1)ミュージアムの置かれた地域・歴史的な文脈、2)ポピュラリティと権威をめぐる文化闘争、を考える上で非常に重要な対象
- →『ポピュラー文化ミュージアム』コラムと本日の報告に通底するポイント

地域・歴史的な文脈

- いかにか厳しい環境であろうとも(山間部や島嶼部)、エネルギー源である石炭を採取しようという近代社会(国家)の執念
- →地域社会(インフラ、組織、人間関係、制度...)が根本的に改変(創造)される
- ⇔石炭産業撤退による急激な危機

軍艦島の例



高島の例

- 1986年閉山の高島炭鉱があった
- 炭鉱最盛期は人口2万人以上
- →現在は451人(2013.4現在)



1996年頃炭鉱住宅が立ち並ぶ様子(左、島内説明パネル)、ほぼ同じ方角を写した現在の写真(右)

地域・歴史的な文脈

- 地域経済の事情...急激な衰退、産業がない
- プライド・承認に関わる事情...「衰退産業」のレッテル、「筑豊」・「夕張」の強すぎるインパクト(暗いイメージ)
- →権威の獲得によるプライドの回復、ポピュラリティの獲得による社会的承認へ...「世界遺産」という選択肢

自治体	市	県	
2001	三家公司が高島町に採掘に無償譲渡 「観光活用を検討」発表するも何もせず		
2002			
2003	→ポピュラリティも権威も なかった「軍艦島」	「軍艦島を世界遺産にする案」の発案 8月、「軍艦島ウォーク」(約100名参加) (野 母崎町民センター)	
2004		11月：長崎市主催で「軍艦島復活ツアー」(原簿)約100 名参加 12月：野母崎町資料館内に軍艦島資料館設置 9月：市内汽船会社による軍艦島定期クルーズ開始 10月：長島にシンボリックな18名参加	小幡博一監修「NO MAN'S LAND 軍艦島」 出版 オーブジェクト「機軸貫取 軍艦島」 「FOREST OF RUINS」(DVD) 「軍艦島家業復興資料館 機軸貫取」(旧版 は1984年)
2005	高島町が長崎市に吸収合併		
2006	6月：軍艦島保存活用説明検討委員会が発足 12月：建物の修繕は事実上困難、1島の長持保存 を行い風化の過程をみせる。(の提案)		→自治体への働きかけの ため、まずはポピュラリ ティの獲得から
2007	10月：自治体と共同で九州・山口の近代化産業 遺産群を構築するも、最終署名へ到達せず	2月：九州産業遺産ネットワーク協議会発足 12月：経済産業省による「産業遺産群」に「軍艦島」も認 定	
2008			→自治体も権威の獲得の ための後押しとして、ポ ピュラリティの獲得へ
2009	1月：九州・山口の近代化産業遺産群(構成資産 の一つとしてユネスコ世界遺産暫定リストに記載 2009年度：2009年度予算で、軍艦島上陸見学路を 造成(総事業費100.712千円)の42.256千円(産地 振興奨励基金)・49.156千円(各種特別事業費) 4月：上陸観光開始		4月「シンガポール」MY LONEY TOWNのジヤ ケット、ミュージックビデオの撮影地に
2010	軍艦島上陸20万人	1月：軍艦島中学校同窓会発足 軍艦島資料館(長崎市野母崎町)改修オープン	オーブジェクト「機軸貫取」とっておきの 軍艦島ガイド(ova) 映画「07 スカイフォール」の物語の登場 目のモデルとしてセントレジスに登場
2012			→権威がさらなるポピュラリティ を実現する？

ポピュラリティと権威の獲得へ

- 2003年頃、木村は写真集でこの島の存在を知る
- →2007年から調査、同年8月には(隣の)高島に一か月滞在し、軍艦島ツアーガイドに密着
- 当時は、「高島」住民による少人数ガイドツアー(上陸禁止時)



13

ポピュラリティと権威の獲得へ

- 2009年4月より、上陸観光ツアー解禁
- 5社によるツアー



2009年4月21日『毎日新聞』1面より

14

ポピュラリティと権威

- 2009年、「九州・山口の近代化産業遺産群」の**構成資産の一つとして、世界遺産暫定リスト**に記載
- 九州・山口以外の釜石なども参加したため、2013年に「日本の近代化遺産群」に名称変更
- ここから洩れた田川市などは、文化庁を通さずに申請できる「世界記憶遺産」として「山本作兵衛の炭鉱記録画」を提出し、国内登録第一号に
- ...近代の記録資料の保存への関心も高まる
- →「文化」をめぐる交渉、折衝、闘争

現在の研究関心

- 炭鉱は**近代社会の縮図**であり、**文化をめぐる闘争の現場**である
- →ここまでが博士論文の研究テーマ
- ここ数年は...
- 炭鉱への様々な意味の対立を、フラットに扱ってしまうことへの疑問...調停不可能
- →事実や記録に立脚した議論の必要性

現在の研究関心

- 産炭地研究会(JAFCOF※)の文化社会学要員として、元炭鉱労働者への生活史聞き取りや、海外の炭鉱関連ミュージアム、アーカイブ視察に参加
- ※昨年度の日本社会学会では研究会メンバーが炭鉱をテーマに2部会で11報告のセッション
- NHKアーカイブスを利用した研究 ←今回の報告
- 以上を通して、過去の記憶や記録、遺物の意味づけをめぐるポリティクス、可能性の研究を進めている

炭鉱とミュージアム、アーカイブ

- 海外に目を転じると、「炭鉱」は決して「マニア文化」にとどまらず、ローカル/グローバルな文脈で、ポピュラリティと権威を得つつある
- →世界遺産やアートプロジェクト
- 国内でも...
- 20世紀の社会・文化を論じる上での「共通言語」としての炭鉱

ツォルフェアアイン炭鉱業遺産群
(ドイツ、2001年世界遺産登録)



19

フェルクリンゲン製鉄所
(ドイツ、1994年世界遺産登録)



20

ブレナヴォンの産業景観
(イギリス、2000年世界遺産登録)



21

ルール地方産業観光マップ



ドイツ鉱山博物館(ボフム)



国立炭鉱博物館(イングランド)



夕張市石炭博物館



田川市石炭・歴史博物館



宮若市石炭記念館



みろく沢炭砒資料館



池島炭鉱さるく



幌内炭鉱景観公園



九州大学附属図書館付設記録資料館(旧石炭研)



South Wales Coalfield Collection / Miners' Library(ウェールズ)

